

---

# 告白させて

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

告白させて

### 【Nコード】

N8967P

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

真彦はいつも彼女を見にそのクラスに来る。誰もがわかっているのに彼はどうしても言わない。皆がその彼にしたことは。こうしたければれの人はどの学校にもいるのではないだろうか。

## 第一章

告白させて

雨宮真彦は学園中の人間に知られている公然の秘密を一つ抱えている。それは本人が否定してもどうにも否定できないものであった。

「来た来た来た」

「今日もうちのクラスに来ました」

「皆勤賞継続中」

女の子達が背は一七〇程で耳が隠れるまで伸ばした縮れた髪を持つている。奥二重の目は少し垂れていて横に長めである。眉は薄い。唇は海苔を斜めにカットしたような形だ。唇は少し厚い。短い丈の詰襟の制服の下には赤いシャツが見えている。そんな外見だ。

その彼を見てだ。女の子はくすくすと笑っていた。

「あれ、雨宮君どうしたの？」

「何か用？」

女の子達はその彼に対して問うてみせた。

「何かありそうだけれど」

「どうして来たのかしら」

「ああ、ちよつとさ」

ここで彼は言葉を一旦濁した。

「何も用事はないんだけどさ」

「それで来るなよ」

「全く」

男連中も笑いながら言ってみせた。

「何しに来てるんだよ」

「言ってみろよ。何でなんだよ」

「たまたまだよ」

こつ言っただけだった。

「たまたまさ。そうそう」

「そうそう?」

「三国志の?」

「全然違うよ」

男連中に突っ込み返す。三国志の曹操ではないというのだ。

「だからな。ちよつと皆元気かなあ、って思つてさ」

「元気かなあつて」

「私達が?」

「そうだよ。俺一応保健委員だしさ」

このことは本当である。尚彼は顔に本当の言葉が出てしまつてい  
る。

「それでなんだけれどさ」

「ふうん、そうなの」

「そうだったの」

そう言われても女の子達は半笑いの顔である。当然男連中もだ。

「隣のクラスなの?」

「それでもなの」

「そうだよ。まあ一応な」

苦しいどころか完全に破綻している言い訳にもなつていない言葉  
が続く。

「けれど皆大丈夫みたいだな。よかったよ」

「あれ、一人忘れてるんじゃないの?」

「誰かね」

女の子達はくすくすと笑いながら話した。

「今いないけれど」

「それでもいいの?」

「誰かつて誰だよ」

口ではこう言つてもだ。顔には明らかに狼狽が浮き出ていた。

「一体。誰なんだよ」

「さあな、誰だろうな」

「誰なんだろうな」

男連中もわざとこんなことを言ってみせる。

「本当にな」

「一体」

「何だよ、何が言いたいんだよ」

真彦はまだ言う。

「本当によ」

「まあ俺達は全員元気だよ」

「今日も欠席も遅刻早退もなし」

何気に真彦に朗報を告げている。

「そういうことだからな」

「よかったな」

「ああ、そうか」

真彦もそれを聞いて笑顔になった。

「ならいいんだけれどな」

「まあ今は帰れよ」

「そういうことだからね」

クラス全員での言葉だった。

「また来いよ」

「待ってるからね」

「何だよ、その待ってるってのはよ」

「お昼呼び止めておくから」

「来たらず」

女の子達はくすくすと笑いながらこんなことも言ってみせた。

## 第二章

「席空けておくからな」

「一緒に食おうぜ」

男連中も言う。

「それでどうだよ」

「昼な」

「おい、何でそうなるんだよ」

真彦は顔では別のことを言っているが口ではこう言うのだった。

「俺は別にな」

「まあ待ってるからな」

「それじゃあな」

「来ないからな」

やはり口ではこう言う。

「だから何でもないんだよ」

「じゃあこっちから来ようかしら」

「そうよね」

するとだった。女の子達が話すのだった。

「連れて来てね」

「そうそう」

「一体何を言ってるんだよ」

真彦はまだ言い繕う。少なくとも自分では言い繕っているつもりである。

「俺はさ、別にさ」

「まあ昼だからな」

「来いよな」

「席は空いてるからな」

「そうしておくからな」

「だから来ないからな」

真彦は少しムキになって話した。そうしてそのうえでそのクラスから去る。皆はその彼を生温かい笑顔で見送る。そしてその日の昼だ。

「おい雨宮よ」

「隣のクラスからお呼びだぜ」

「すぐに来てくれってよ」

クラスにいたらすぐにクラスメイト達から声をかけられたのだった。

「弁当持ってくれってな」

「そう言ってるぜ」

「すぐに行けよ」

「何でだよ」

真彦は自分の席にいる。そこに座ったまま今丁度弁当を出そうとしていたところだった。そこで手を止めて問い返したのだった。

「何で俺があこのクラスに行かないといけないんだよ」

「さあな」

「何でだろうな」

「それはな」

クラスメイト達はにやにやししながら応える。

「まあ行けよ」

「呼んでるんだからな」

「席まで用意してるってよ」

「行く訳ないだろ」

真彦は一応無然として言葉を返す。

「俺はここで食うよ」

「だから行けよ」

「折角呼んでるんだからな」

「いるしな」

一人がさりげなくだが露骨に言ってきた。

「昼はな」

「だから誰がいるんだよ」

一応口ではこう返す真彦だった。

「それで誰がなんだよ」

「だから行けって」

「俺達と食うよりずっといいだろ？」

「だからな」

クラスメイト達はさらに急かした。

「ほら、待ってるからな」

「行け行け」

「感想は後で聞いてやるからな」

こうして彼を強引に立たせて隣のクラスに行かせた。そしてそのクラスの人間に言うのだった。

「連れて来たからな」

「これでいいよな」

「後はな」

「ああ、悪いな」

「じゃあ雨宮、一緒に食おうぜ」

「それじゃあな」

彼等は連れて来た面々に礼を言った後で真彦にも声をかけた。

### 第三章

「いるしな」

「折角だしな」

「美人を見ながら食べるのもいいだろ」

「だから美人つて何なんだよ」

まだしらばっくれる真彦だった。しかしその手には弁当がしつかりとある。

「俺は別にな」

「ああ、わかったからな」

「食おうぜ」

「それでいいよな」

「何かわからないけれどな」

まだ言うがそれでもだった。彼は結局そのクラスに入ってそのうえで用意された席に着く。そのクラスでは皆あえて何も言わない。ただし彼ともう一人を見て密かにくすくすと笑っていたりもしていた。

「あれで誰も気付いてないってね」

「思えるのが凄いし」

「ばればれだし」

「全く」

女の子達がとりわけくすくすと笑っている。

「ほら、見てよ。ずっと見てるし」

「もう見る目が違うし」

「ガン見じゃない」

真彦は食べている間中ずっと一点を見ている。その先には茶色の癖のある髪を長く伸ばした小柄な女の子がいた。

肌は白く眉は薄い。そしてその目はかなりの垂れ目である。にこやかな表情が実に眩しい。その娘をずっと見ているのである。

「入学して一カ月後にはああだからねえ」

「二年になってもね」

「そんなのだしな」

「先生だって皆気付いてるし」

学園の誰もが知っていることなのは確かだった。

「早く言えばいいのにね」

「こんな状況で断ることなんてできないし」

「里沙だってそんな娘じゃないし」

こう話す。ひそひそと話しているがそれ以上にもう皆わかってるので聞いても特に何も思わずそれぞれ弁当やパンを食べながら真彦を見ていた。

そしてだ。真彦と一緒に食べている面々はだ。わかっけて言うのだった。

「なあ、雨宮よ」

「御前今彼女とかいるのか？」

「どうなんだよ」

「いないよ」

こう答える彼だった。

「それがどうしたんだよ」

「いないのか、そういえばな」

「そうそう」

「岡村さんもそうだしな」

わざとその名前を出してみせた。

「あの娘いないってな」

「募集中ってか？」

「そうらしいな」

「おい」

そう聞いてだった。真彦は目を座らせて問い返した。

「何でそう言うんだよ」

「いや、別にな」

「ただ聞いたただだよ」

「なあ」

「いないってな」

「岡村さんに彼氏いないのは事実だぜ」

そして一人がこう言った。

「どうよ、それでな」

「御前も彼女いないしな」

「何がどうなんだよ」

ここでまたムキになる真彦だった。

「それがよ」

「あれっ、それが一番気になるんじゃないの？」

「違うの？」

今度は女の子達がからかってきた。

「理佐に彼氏がいるかどうか」

「それじゃないの？」

「何でそんな話になるんだよ」

真彦はまだしらばっくれていた。

「そんなことによ」

「まあシラを切るのならいいけれどな」

「皆わかってるしね」

「勝手な憶測するなよ」

まだこう言う彼だった。

## 第四章

「そんなことはよ。とにかくな」

「とにかく?」

「どうしたの?」

「飯食うんだろ」

話をそこにしたのだった。昼食のだ。

「そうじゃないのかよ」

「ああ、まあな」

「お昼の時間だし」

だからだと返す面々だった。

「それじゃあ食うか」

「美人を見ながらね」

「美人って誰なんだよ」

真彦はシラを切り続けていた。しかしその目はクラスの中にいる茶色の髪を伸ばして薄い眉をしたたれ目の小柄な少女に釘付けとなっていた。

見ればそのたれ目はきらきらとしており肌は白い。あえて意識せずに彼の視線を気にはしていないようである。しかし何処か恥ずかしそうな顔をしていた。

真彦はとにかくそのクラスに入り浸りである。このことは職員室の話題にもなっていた。教頭ですらこんなことを言う始末であった。

「雨宮君はなあ」

「ああ、あいつですね」

「相変わらずですよ」

「言わないのかい?」

その痩せた顔を傾かせて教師達に話す。

「もついい加減」

「その話はないですね」

「あれで勇氣はないですから」  
教師達も知っていて言っている。  
「もう誰でも知っているのに」  
「自分だけそうは思っていないませんし」  
「わかるよ」  
教頭はあつさりと話した。  
「あれはね」  
「もう表情で」  
「それに態度で」  
「全くだよ。あれはないよ」  
教頭はさらに言った。  
「一年の時からだしね」  
「岡村も大変だけれどな」  
「全くですよね」  
「ごちゃごちゃとした職員室の中で場違いな話が為されていた。」  
「あそこまでいつも見られていたら」  
「かなり」  
「告白すればいいんじゃないのか？」  
教頭はかなりダイレクトに話した。  
「もうあそこまでいったら」  
「そう思うんですけれどね」  
「私も」  
教師達ですらこう言う程だった。  
「絶対に成功しますし」  
「雨宮君ってあれで格好いいですしね」  
「少なくともルックスはいい真彦だった。それはいいのである。」  
「性格も悪くないし」  
「そうですね」  
「成績もそれなり」  
「大学も行けますよ」

学園生活自体はそつなくこなしている彼なのである。

「あれさえなければなあ」

「いいんですけれどね」

「まあ相手がある話だからな」

教頭の今度の言葉は素っ気無いものだった。

「岡村さんがね」

「問題はあの娘がどうするか」

「それですね」

「そう、それだよ」

教頭が指摘するポイントはまさにそこであった。

「岡村さんがどうするかな」

「兩宮は多分ずつとあのままですしね」

「告白とかはしないで見ているだけですか」

「見るのが精一杯だね」

教頭はまた言った。

「あれじゃあね」

「やれやれ、早く言えばいいのに」

「全くですよ」

教師達の間でもそんな話がされていた。しかし真彦は相変わらずその理佐を見ているだけであった。周りはそのような彼を見て遂に言った。

「もう見ていられないな」

「全くよね」

「早く言えよ」

「そうそう」

こんな話をしていた。

## 第五章

「どうせ告白して振られるのが嫌なんだろうな」

「っていうか怖い？」

「そうだよな」

このことも見抜かれていた。誰にもだ。

「告白して振られるのが怖い」

「そういうことか」

「自分から言って」

「それだったら」

ここで話が動いた。

「もう一方が動けばいいんじゃない？」

「もう一方っていうとそれって」

「岡村さん？」

「理佐？」

彼女のことを話に出て来た。

「あの娘が動けばっていうの？」

「そういうこと？」

「ああ、それだよ」

言いだしっぺの言葉である。

「岡村さんが言えばどうかな」

「理佐ねえ」

「あの娘が言うの」

女の子達の顔が微妙なものになった。

「何かそれってあまり柄じゃないけれど」

「理佐にはね」

「そうよね」

彼女達の顔はいぶかしむものになっていた。賛成していないのは明らかである。

「ちょっとねえ」  
「理佐ってそうしたことには疎いからね」  
「恋愛とかにはね」  
「ああ、そうだよな」  
「岡村さんって彼氏いないしな」  
男連中もその言葉に頷く。  
「両宮に見られても戸惑ってるばかりだしな」  
「恥ずかしいと思ってるけれど」  
「けれどあれよ」  
「女の子の一人の言葉である。」  
「理佐もあれでまんざらじゃないから」  
「あつ、そうなのか？」  
「まんざらじゃないのか」  
「そうなんだ」  
「ええ、そうよ」  
「それは安心して」  
女の子達の言葉がここで動いていた。  
「だってさ。あそこまで好きになってもらったらね」  
「誰だって悪い気はしないじゃない」  
「自分を好きな相手にはね」  
「そういえばそうか」  
「そうだよな」  
男連中もそれで納得した。  
「俺だってな」  
「俺もな」  
「俺もだ」  
彼等は口々に言っていく。  
「あそこまで好きになってもらったらな」  
「応えたいよな」  
「性格だって悪くないしな」

「はつきり言っていていい奴だしな」

色々問題はあるにしろ根幹の意味においてその人間性は悪いものではない真彦である。だから彼等もここでは素直に言っていたのである。

「それじゃあな」

「岡村さんだつてな」

「いいのかな」

「絶対そうよ」

「ねえ」

女連中は太鼓判を押ししてみた。

「だつてねえ。本当に嫌な相手だつたらね」

「顔も見たくないし」

「すぐに消えるわよ」

「女つてそうしたものだから」

「そうしたものかよ」

今の言葉にはすぐに男からの突っ込みが来た。

## 第六章

「女ってきついんだな」

「本当に嫌いな相手にはね」

その場合はと限定はされる。しかしそれでも男連中にとっては実に気になる、しかもかなり残酷な感じがどうしても消えない言葉であった。

「そうするから」

「そうなのか。まあとにかくだ」

「じゃあ岡村さんはそれでいいのか」

「兩宮のこと嫌いじゃないんだな」

男連中は話の根幹のことを問うた。

「結局のところは」

「そうなんだよな」

「そうね」

女連中の一人が答えた。

「それは言えるわ」

「じゃああいつが告白すればその時は、か」

「もう岡村さんはい、なんだな」

「頷いてくれるんだな」

「まあそうなればね」

「そうなるでしょうね」

女連中は男連中の問いにまた答えた。

「そうなるから」

「よし、じゃあ話は決まりだな」

「そうだよな」

男連中は顔を見合わせて頷き合った。

「あいつに告白させるか」

「そうするか」

こう決めたのであった。しかしであった。

女連中はだ。彼等に対してクールに問うてきた。

「どうやって?」

「えっ!??」

「どうやってって?」

「だからどうやってよ」

そのクールな口調でまた問うてきたのだった。

「どうやって雨宮君に告白させるのよ」

「あの引っ込み思案に」

「どうやってなのよ」

「どうやってって」

そう言われるとだった。彼等も困った顔になる。そのうえで次第に困惑した顔になっていきそのうえで女連中に対して言葉を返していく。

「ええと、それは」

「だからあいつに好きだって言わせて」

「それだろ」

「だからどうやってよ」

やり取りはまさに堂々巡りであった。

「あの臆病者に言わせるのよ」

「その告白」

「どうやって?」

「ええと、だからな」

「とにかく言わせるんだよ」

「そうするんだよ」

男連中は実に内容のない言葉で返した。

「あいつに言わせるんだよ」

「好きだってな」

「それしかないだろ」

「そう、好きだってね」

女連中のうちの一人がこのことを指摘してみせた。

「言わせるのよね」

「ああ」

「それだよ」

男連中もその言葉に対してそれぞれ頷いてみせた。

「あいつに岡村さんが好きだって言わせるんだよ」

「それで万事解決だろ？」

「ハッピーエンドだろ」

「全ては決まったわ」

女連中のうちの一人の言葉だ。

「そう、好きだって言わせるのよ」

「理佐が好きだってね」

「本人の前でね」

そうしてだ。こんなことも言われるのだった。

「雨宮君が気付かなくてもいいのよ。理佐がその好きだって言葉を聞けばいいのよ」

「雨宮君が言ったその好きだって言葉をね」

「それよ」

「気付かなくてもいいのか」

「そうなのか」

男連中は女連中のその策略をじっと聞いた。彼等にとっても彼女達その策略は実に興味深くそのうえ面白いものだった。自然と聞いてしまうものだった。

## 第七章

「じゃああいつに言わせて」

「岡村さんにそれを聞いてもらおう」

「それが」

「いいわね」

「それで行くわよ」

女連中は男連中のそれぞれの顔を見ながら強い顔で告げた。こうして彼等は真彦と理佐のところに行つてその策略を仕掛けたのであった。

まずはだ。男連中がだ。真彦を学校の屋上に誘い出した。

学校の屋上には誰もいない。ただ青い空と白い校舎が見えるだけである。その二つを見回す場所で彼の話を聞くようにしたのだ。

彼等はだ。真彦を前にして問うた。

「なあ、いいか？」

「聞きたいことがあるんだけどな」

何気なくを装つて彼に問う。青い空の下で。

「御前岡村さんのことどう思ってるんだ？」

「実際にどうなんだよ」

「どうっていいのかよ」

真彦は彼等の言葉を受けてだ。まずは険しい顔を見せた。

「それって言わないといけないのかよ」

「一つ言っておくが誰にも言わないぜ」

「それは約束するぜ」

彼等はまずこのことを言った。

「絶対にな」

「それはな」

「言わないのかよ」

「ここにいるのは男だけだぜ」

嘘だがあえて言ってみせた。

「それで何でなんだよ」

「隠しごととしても仕方ないだろ」

「なあ」

それぞれ顔を見合わせて演技を試みせる。

「それならな」

「そうじゃないのかよ」

「それもそうか」

真彦は乗ってしまった。男同士で今屋上には彼等以外の誰もいないという現実もまた彼をしてそう誘い出してしまったのである。

「男同士だしな」

「内緒にしても仕方ないだろ」

「そうだろ？」

これは実は別の意味で言った言葉だ。もう既に皆知っているという意味だ。

「だからな。言えよ」

「本当に秘密にするからな」

「そうか」

ここまで聞いてだ。真彦も遂に頷いた。

「それならな」

「それでどうなんだ？」

「岡村さんのことな」

このことを実際に問うてみせた。全員で真彦に促す。

「どう思ってるんだよ」

「好きなのか？嫌いなのか？」

「じゃあ言うな」

真彦はまずは一呼吸置いた。心の整理をしているのだ。

「それじゃあな」

「ああ、それでな」

「本当はどうなんだ」

「好きだよ」

彼は遂に言った。

「俺岡村さんのことが好きだ」

「本当か？」

「嘘じゃないよな」

「嘘なものか。入学式ではじめて見た時から好きだった」

その時からだというのだ。彼は真剣そのものの顔で語る。

「あんな綺麗な娘いないだろ」

「まあ確かにな」

「綺麗だよな」

これは多くの者が認めることだった。理佐は確かに綺麗だ。しかし真彦の言葉はこれで終わりはいらない。彼は聞かれもしないのにさらに言った。

「それにな」

「ああ、それに」

「どうなんだよ」

「可愛いしな」

今度の言葉はこれだった。

「あんな可愛い娘いないだろ」

「言葉一緒じゃないのか？」

「だよな」

「綺麗が可愛いに変わったただけでな」

「一緒だよな」

男連中は今の真彦の言葉にはいささか呆れてしまった。しかしそれはすぐに抑えてそのうえであらためて彼の話を聞くのだった。

## 第八章

「それだけか？」

「顔だけか？」

「性格だつてな」

顔だけを見ているのではなかった。

「素直だし真面目だし」

「いい娘だつていうのか」

「つまりは」

「気も利くし優しいし面倒見もいいだろ」

ほぼ完全に褒めちぎりである。しかし本人に自覚はない。

「だからな」

「いいつていうのか」

「それで」

「しかも小柄でスタイルもいいしな」

「小柄なのはわかるけれどな」

皆それはいいとした。理佐の背は一五〇程度しかない。小柄とい  
う他ない。

「けれど胸ないよな」

「それでスタイルいいか？」

「何か違うないか？」

「そうだよな」

「脚だつて綺麗だしな。全体的に均整が取れてるしな」

これは真彦の好みだった。彼は貧乳派なのだ。

「だからな」

「いいのか」

「スタイルもか」

「とにかく全部がいい」

完全に全肯定だった。

「悪いところなんてないだろ」

「だから好きか」

「それでか」

「言っぜ。俺はあいつしか見ない」

断言だった。

「あいつ意外の誰も見ないからな」

「そこまで言うか」

「極端だな」

「極端でも何でも事実だ」

断言するその言葉の調子は変わらない。むしろ語尾が強くなつてさえた。最早誰も聞いていないのに自分から言っている状況だった。

「それはな」

「それじゃあ誰よりも好きか」

「何よりも」

「一生好きだ」

これまた強い断言だった。

「あいつがな」

「よし、わかった」

「聞いたよな」

「ええ」

ここで、だった。男連中の言葉に伝えてだ。屋上の階段の裏手から声がしてきた。何とその声は女のものに他ならなかった。

「確かにね」

「理佐も聞いたわよ」

「間違いなくね」

「何っ!？」

理佐の名前を聞いてだ。真彦はその顔に驚愕の色を浮かべた。

「岡村、いるのか!？」

「はい、ここにね」

「いるわよ」

女連中がその階段の裏手から出て来る。しかもそこには確かに理佐もいた。

「理佐聞いたから」

「確かにね」

「どういうことなんだ」

真彦は今の状況に唾然としていた。そのうえでの言葉だ。

「何でここに」

「ああ、悪いがな」

「御前のその考えをな」

「理佐に聞いてもらいたかったのよ」

男連中も女連中も言うのだった。

「岡村のことどう思ってるのかな」

「理佐本人にね」

「それでなのよ」

「おい、騙したのかよ」

真彦は少し落ち着きを取り戻してだ。怒った顔になって彼等に問うた。

## 第九章

「酷いだろうが、これは」

「まあ騙したことはなるな」

「それはな」

彼等もそれは否定しなかった。

「けれど岡村は確かに聞いたよ」

「それはね」

「聞いたのかよ」

「そうよ」

女連中のうちの一人が言ってきた。

「今確かにね」

「うっ……」

「それで理佐」

「どうなの？」

完全に黙ってしまった真彦をよそにもう一方の主演に言葉が集中する。

「彼はああ言ってるけれど」

「あんたはどうなの？」

「受けるの？」

実に具体的な問いだった。

「それで」

「うん」

その理佐はだ。こくりと頷いてきた。

「そうさせてもらいたいけれど」

「よしっ、わかったわ」

「それじゃあね」

こうしてだった。あらためて真彦の顔を見てそのうえで話してきた。  
6

「はい、聞いたわね」

「理佐はいいって言ってるから」

「そういうことだから」

「いいって!?!」

しかしであった。真彦はというのだ。今の事態に呆然となっていた。

「どういうことだよ、それって」

「だからな。岡村さんはいいっていうんだよ」

「聞いたよな」

今度は男連中が彼に言ってきた。

「そういうことだからな」

「よかったな」

「よかったってことは」

ようやくだった。真彦は事態を理解できてきた。そうなるまでの心の整理がだ。頭の中ではできないでそれで今やっと、ということなのだ。

「それじゃあ本当に」

「ええと」

その理佐がだ。はにかんだ笑顔で口を開いてきた。そして言う言葉は。

「雨宮君」

「あつ、ああ」

「はじめて名前呼ぶかな」

そのはにかむ笑顔での言葉だ。

「けれどね」

「けれど?」

「私でいいかしら」

こう真彦に言ってきた。

「本当に」

「いや、俺だって」

真彦の顔は真っ赤になっていた。そのまま信号にも使えそうだ。その真っ赤になった顔でだ。理佐のその言葉に対して問い返すのだ。つた。

「あのさ」

「ああ、何だ？」

「どういうの？」

「俺でいいかな」

周りの言葉を聞きながらこう理佐に告げた。

「俺で」

「謙遜？」

「そうみたいね」

周りはそんな彼の言葉を聞いて言った。皆温かい笑みを浮かべている。

「謙遜したりもするのか」

「意外ね」

「俺なんかでいいのか」

彼はまた言うのだった。

「本当に」

「だって。私のこと好きなのよね」

理佐は今しがた彼が言ったことをそのまま返した。

## 第十章

「そうよね」

「ああ、そうだ」

「それなら。御願い」

「御願い？」

「そう、御願い」

理佐はだ。こつも言った。

「私だつて自分が好きな人と付き合いたいと思つてたし」

「自分が好きな」

「そう思っているし」

言葉は現在形だつた。過去ではなかつた。

「これから御願いね」

「ああ」

真彦は理佐のその言葉に頷いた。

「俺も。宜しく」

「それじゃあまずは」

「まずは？」

「今日の放課後だけけれど」

理佐からの言葉だ。それを言うのだった。

「一緒に帰ろう」

「下校に」

「うん。下校を一緒にね」

今の理佐の言葉を聞いてだ。周りは色めきたつた。

「これってよ」

「そうよね」

「デートの申し込み!？」

「理佐から」

その通りだつた。まさにそれだつた。

その理佐はだ。真彦にさらに言ってきた。

「駄目？一緒に」

「い、いやさ」

真彦は顔を真っ赤にさせたままだった。その顔でまた言う。

「一緒に歩くんだ」

「駄目？」

「駄目じゃない」

それはすぐに否定した。本当にすぐだった。

「けれど。夢みたいだ」

「夢じゃないから。今日から一緒にね」

「ああ、帰ろう」

「それからだから」

理佐もであった。顔は真っ赤だ。その真っ赤になってしまった顔で自分と同じく真っ赤な顔になっている真彦に対して言うのであった。

「はじめよう」

「二人でな」

二人はその真っ赤な顔でこれからのことを話すのだった。そんな二人を見て周りは優しい笑顔になっていた。そうして彼等も言った。

「ハッピーエンドだな」

「そうね」

「まずは何より」

二人のことを見ての言葉である。

「これからも見させてもらうけれどな」

「さてさて、どうなるか」

「楽しく見させてもらおうか」

二人を見る目は何処までも優しくかった。そして温かいものだった。

二人は今ようやくはじまったのだった。かなり長い前置きの後で。

告白をせて

完

2  
0  
1  
0  
・  
7  
・  
2  
8

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8967p/>

---

告白させて

2011年1月2日22時25分発行